

1992年10月、発足したばかりの留学生センターに着任したころ、日本語教育の対象は、学部生のほかは、主として文科省の奨学生であった。カリキュラムは朝から夕方まで日本語漬けであった。その後、「留学生10万人計画」の歩みと同じくして、本学の留学生受け入れプログラムも増え、日本留学の目的や日本語学習への取り組みも多様化してきた。

留学生が増え多様化すれば、それだけでキャンパスが国際化しメリットがあるわけではない。一般学生との交流の仕組み作りとともに、留学生にとっては、あえて日本に留学した意義を体感できる機会の提供が重要性をおびてくる。留学生支援の一環としての日本語教育は、そのための試行ができるところでもある。

たとえば、異文化接触の意義として、異質なものが交わりぶつかり合う過程で、新たな価値が創出されるという創造的な面が強調される。しかし、その過程で葛藤し思い悩むこともあり、その克服は課題である。その対処、予備的対応の一つが、言語や背景にある考え方や慣習に関する知識の習得と疑似体験である。そうした意味で日本語教育の教室はコミュニケーションのミニ実験室であり活気を帯びている。

一方、この小さな空間でおきている営みは、日本人学生が他者への認識や国際感覚を深める身近な機会でもある。言語習得を目的とした語学クラスでは、言語的、心理的側面に重心がおかれるが、言語学習を社会的側面や歴史的側面から立ち止まって考える機会も必要であると考える。こうした機会として、教養科目の「国際理解」、人間文化課程の「国際学」等の授業で、誰もが実践者である言語学習を社会的文脈の中で捉えなおす作業を行い、今後国際交流の担い手となっていくことを前提に議論をすすめている。

横浜は、開国以来、日本研究や言語学習においても多くのものを世界に発信してきた。来日外国人による研究紀要の発行、日本語辞書や教科書の編纂、さらに、外国語伝習所が設置され外国語学習も積極的に進められたのが横浜である。また、英語と日本語の混交である方言が、横浜ピジンと呼ばれ明治の初めには『横浜方言演習』という教科書も作成された。対外交流に欠かせない言語文化の研究基盤が横浜で確立されたという事実は、本学の学生の言語学習や国際交流活動への動機付けとして大いに活用すべき素材となろう。

在学中の留学経験の有無に関係なく、卒業後は、地域社会で諸外国の文化に接し、言語学習に関わることになるだろう。また、留学生は、帰国後、日本留学経験者として日本語を習得してきたものと期待されよう。留学目的の学位取得に加え、言語・文化実践力というもう一つの財産を持ち帰ることができるよう、帰国後も視野にいたした日本語日本文化学習を支援していきたい。